



№14 2010・12・15
連絡先 〒 334-0001
鳩ヶ谷市桜町 6-13-16
森 克彦 048-283-3183
清水 昇 043-291-7293

ハイウェイ九条の会ホームページ <http://www3.nns.ne.jp/pri/toshi601/>

九条の会 平成二十二年

持永 龍一郎 千葉県在住

日本の道路は古来、徒歩と騎馬。車は対象外であった

名神高速道路が開通して45年になるという。NEXCO中日本道路ではいろいろな記念行事が行われているようであり、私にも昔の土工の話をしろということで座談会に誘われた。翌日、名神の管内道路を案内され、初めて新名神道路という名前の米原～亀山間を走った。さらに、昔、建設に従事した東名阪道路を走り、名古屋までの間の路線の風景を楽しんだ。

近頃的高速道路で目を引くのは各地のSAの素晴らしさである。近頃流行の百貨店のデパチカみたいに色々な品物が飾り立てられ華やかである。昔は、せいぜいコーヒーぐらいがサービス品だったのに、全く予想もしない変貌である。

日本の道路は、古来、徒歩と騎馬を主体とし、車は全く対象としていなかった。街中の街路はそれなりに整っていたが、いったん山道にかかるると惨憺たるものであった。明治に入っても、来日した女性旅行家の記録によると、腰まで泥に浸かったということが、各地で見られる。

日本人の道路感覚の無関心について、有名な話がある。

戦争中日本海軍の開発したゼロ戦は、当時世界最高の水準にある精密機械であった。これを名古屋の三菱工場から岐阜県の各務ヶ原飛行場まで運ぶのに、牛車で運搬したというのである。トラックは揺れがひどくて、精密部分を損傷する恐れがある。牛より速度は速いが馬車でも道路がひどくて損傷する恐れがある。機体を分解して牛車で恐る恐る運んだというのである。40kmを一日がかりで運んだという今となっては信じられないくらいの道路後進国である。名神高速道路の建設に着手したのは、この道路状態から僅か13年後のことである。建設の機械化を始めとする近代道路技術は無に等しいとって良いであろう。

将来の予測は出来ないが、 自然の動きには原因がある

ところで、話は変わるが、物理学でロジスティック曲線というのがあり、複雑系の物理学といわれているものがある。今までの科学では実験で求められた式が自然の摂理を表し、自然はその方式に従って連続的に動くということを前提に成り立っていた。ところがこのカオス現象を見ると、どうもちょっとした条件次第で、とんでもない混乱が起こることが証明されるようになった。だから、我々が高速道路を作り、同じ仕様書で同じ

(二面に続く)

ように作っても、どういう条件が分からないが、壊れる所もあれば壊れない所もあるんだということが自然だと言うことが、コンピューターの発達によって分かってきた。

いろいろな話を述べてきたが、要するに、将来の予測は出来ないということを主張したかったのである。名神高速道路の償還計画を見ると、計画交通量は 38,000 台までしか予測していない。今日の 10 万台の交通量は当時の最高の数式を持ってしても予測は出来るものではなかった。ましてや、公団が 3 社に分割されるなど全く予想されるものではなかった。

しかしながら、この混乱の結果にも何らかの原因はあるというのがまた現代科学の結論である。先述のロジスティック式で X_n 値を X 軸に、次の X_{n+1} 値を縦軸にグラフを描くと、綺麗な放物線を描くことを知ることができる。これを「天には神がいる」と物理学者は本を書いている。エクセルを使ってもっと詳しく確かめて見られたい。

要するに、将来は予測できないが、自然の動きはまた原因がある。人間の動きについては、歴史を見てみるとが肝心だと自然は教えてくれる。ローマ史を 15 年にわたって 15 巻書いた塩野七生女史は、歴史の重要性を昔から主張している。最近の「日本人へ」という新書に次のような記述が見られる。

「中世・ルネサンス時代の都市国家の雄であったヴェネツィア共和国の長命の理由について一つだけ書いておきたい。それは、徹底した情報収集とそれを駆使しての冷徹な外交である。経済大国ではあっても軍事大国には一度としてなれなかったヴェネツィアだが、後にイギリス人が賞賛するほどの外交大国になることで、軍事大国の間を生き抜いていったのであった。私が、しつこいと言われるくらいに日本の外交に注文をつけるのも、わが国にとっての外交の重要性を信ずるがゆえなのである。」

今日の新聞に次のような投稿も見られた。「尖閣諸島

の領有権の論拠は必ずしも鉄壁ではない。この領有は日清戦争中の明治 28 年に台湾併合と重なる流れで編入したものだ。中国や台湾から見れば、1915 年の理不尽な対華 21 カ条要求へとつながる日本の領土拡張の中で奪い取られたという認識になるのもやむを得ないという一面がある」

色々な話や意見が有るものである。何を判断の基準とするのか、意見はそれぞれもっともで話は尽きない。何の力も無い無力の我々は、戦争はしないという平和憲法を守って、泰然と腰を抜かしているしかない。



市長選に立ちました

みんなと一緒に精一杯ガンバリましたが及びませんでした。

森かつひこの勇姿とその結果です。どうぞ笑ってやって下さい。そして、いま想定外の余震が続いています。正直、選挙が終われば普通の生活が出来ると思っていたのに・・・

選挙の結果は合併反対派を勇気づけています。世界に一つしかないこの鳩ヶ谷のまちを地図から無くしたくない。

“Small is Beautiful”わたしの好きなことばです。

みなさまのご支援をこころからお願いいたします。

2010/11/16 森 克彦 埼玉県在住

普天間基地は本当に必要か

軍事評論家・前田哲男氏の講演を聞いて
K.S 埼玉県在住

今、沖縄では米軍普天間基地の今後のあり方を最大の争点に知事選が戦われています。

本土の私たちにはなじみの薄い沖縄の米軍基地の問題点について学ぼうと、去る10月3日、埼玉県加須市の生涯学習センターで、地域の九条の会主催による「米軍普天間基地は本当か」と題した講演会、講師：軍事評論家の前田哲男氏(日本国際大学元教授)がありました。

講演の概要を紹介したいと思います。

沖縄の米軍基地の歴史

沖縄県は、日本の国土の0.6%の面積である。その狭い県土に、日本にある米軍基地面積の74%がある。実に沖縄本島の面積の約二割、18.4%にもものぼる。特に、本島中部は50%が基地である。

まず、この米軍基地はどのような歴史をたどってきたのか“おさらい”をする。

第二次世界大戦末期・「捨石」

戦争末期の1945年4月1日、米軍は沖縄中部の宜野湾村に艦船500隻で押し寄せ、8万人にも及ぶ圧倒的な兵力を上陸させた。

宜野湾の村人は、ある者は北へ、ある者は日本軍と共に南へと逃げた。

沖縄は、本土防衛と国体(天皇体制)護持の掛け声の下、民間人も捕虜になることを禁じられ、総力で戦うことが求められた。**国体護持の捨石**である。

米軍は、宜野湾村に最初の前線基地を設け、逃げる日本軍を追って南に軍を進め、次々に前線基地を設けていった。



すなっば
ユズ

加須市
付近で
よく見ら
れます

戦争が終わり、村人が戻ってみると、緑豊かな村は無残にも広大な米軍基地に変わっていた。それだけではなく、**戦争が終わっても戦時国際法により、米軍の統治下**におかれ、米軍が必要とあれば銃剣により住民を追い払い、ブルドーザーによって家も畑もお墓までもが敷き均されて拡張された。

サンフランシスコ講和条約・「切捨て」

1946年9月8日調印のサンフランシスコ講和条約によって日本は連合軍統治を終え、独立国となった。しかし、沖縄は小笠原諸島とともに**日本から切捨てられ**、アメリカの統治下におかれることとなった。

沖縄は日本の法律の及ばない場所、**アメリカの法律に基づく、アメリカの高等弁務官**によって統治されることとなった。当然、アメリカの法律により基地の使用は継続された。

施政権の返還 = 日本復帰・「要石」

1972年5月、施政権返還により米国統治が終わり日本に復帰した。日本国の沖縄県となり日本の法律が適用されることとなった。しかし、今度は日米安保条約の適用である。

米軍基地も核も無い沖縄を目指した本土復帰であったが、結果として、基地に関して言えばなにも変わらなかった。

今度、沖縄の米軍基地は、日米安保条約により**日本の法律によって米軍の戦略上大切な要石**として使用されることになったのである。

普天間基地は本当に必要か

米軍普天間基地は「抑止力」と言われている。しかし、定員1万8千人の海兵隊だが、イラクやアフガニスタンに行ってしまう、3500人位しかいない。また、海兵隊は米軍の長期戦略でグアムに移転する計画なのである。「抑止力」になっていない。

北朝鮮や中国の脅威が言われている今、**憲法九条を持つ日本は**、力には力で対抗する「対立と威嚇 = 勝者が敗者か」のパワーゲーム型安全保障を見直し、東南アジア共通の安全保障「公正と信義 = どちらも勝者」のほうに重心を移し変える必要がある。

先例として、ヨーロッパは近年まで戦争に明け暮れ「戦争の巣窟」と言われた。今はEUとして単一通貨による一つの経済圏をつくりだし、EU内から戦争を一掃した。と解決の方向が提起されました。

今、中国に対抗するため、政府は日米同盟の強化をうたい、また、尖閣諸島に自衛隊を、などの動きがありますが、パワーゲームは危険なだけで得られる物は何も無いと思いました。

「九」との縁を大切にしたい

とうでん ぜんこう (仮名)

千葉県在住

「---耐え難きを耐え、忍び難きを忍び---」昭和 20 年 8 月 15 日正午古びたラジオで聴いた玉音放送。翌日の新聞トップ記事に“終戦”の大文字が躍る。当時 9 歳の少年だった私には鮮明な記憶として今も脳裡に焼きついている。

戦況悪化の下、食糧難に学童疎開。学童の洋服の金ボタンまで没収し木製品に替えさせられ、空襲に備え目立つ白のシャツは着用禁止に。同年の沖縄地上戦、同年春～夏の全国主要都市への空襲で福岡市も被災、広島・長崎への原爆投下、そして終戦へ。

戦後の学校で習った「新しい憲法のはなし」は当時の少年の心に沁み込んだ。もうあのイヤな戦争はしなくていいのだ、と。それから 65 年、地球上で未だに争いが絶えない中で日本は曲がりなりにでも平和で来られたし、これも平和憲法のお陰だと思ってきた。

ところが 2007 年 5 月改憲のための手続法である国民投票法が強行採決で成立した。多々問題点を含むこの法律は正に改憲ならぬ壊憲だと憂える一人である。憲法に対する私のスタンスはいわば活(立)憲派だ。国家権力を法的に制限した憲法に基づいて政治を行う「立憲主義」。その本質をキチンと認識し行動することが国会議員はもとより国民各位にも求められるのではないのか。やれ改憲派・護憲派だと言い張る風潮の中、日本国憲法とりわけ九条の意義を大切に考える「九条の会」が全国各地で活動していることは頼もしい。そこで更に国家権力の暴走を食い止める機能をもつ立憲主義の認識を共有したいものである。

以前読んだ伊藤真著「憲法の力」(集英社新書 2007・7 初版)は啓発される点が多い。憲法についての理論的・実践的な内容で、記述も実に明快で分かりやすい。伊藤塾を主宰する著者は、立憲主義についても解説しつつ世界に数少ない日本国憲法のすばらしさを十分に述べているからである(未読の方にはご一読をお勧めしたい)。

私は何故か「九」に縁が深い。九州・福岡市西部の

農村地帯に生れ育ち、九歳で終戦を迎え、九の名が付く国立大学を出て社会人に。現在は複数の九条の会に参加している。

そして第九合唱団に属して九年。毎年末に第九コンサートで仲間と共に“Freude”とハモることになっている。ベートーベンの第九の歌詞の中で、“alle menschen werden bruder” (全ての人々は兄弟(同胞)になる)と出てくる場面がある。ここを歌う時いつも感じるのは、全世界の人々が争い・憎しみを超えて兄弟になりたい、これこそ前文・九条に規定された平和主義・日本国憲法の考え方と通底するのではないのか、と。

これからも「九」との縁を大切にしつつ「九」に拘る生き方をしたいと考えている。

2010 年 11 月

主な出来事

- ◎ 7 月 26 日、渡辺喜美代表は都内で行った講演で「みんなの党は教条主義的な護憲主義は取らない。憲法も時代に合わせて見直してゆく。当然 9 条もその中にはいる」と述べる。
- ◎ 9 月 24 日、9 月 7 日に中国の漁船が尖閣諸島沖で巡視艇に衝突し、海上保安庁が乗組員を公務執行妨害で逮捕し、中国政府が次々と強い対抗処置を打ち出すなか、那覇地検は逮捕した中国人船長を処分保留で釈放した。
- ◎ 9 月 23 日、中国政府は「4 人が軍事施設保護法と刑事訴訟法に基づき居住監視を受けている」と日本政府に通報してきた。4 人は日本のゼネコン「フジタ」社員。なお、10 月 9 日までに全員保釈された。
- ◎ 11 月 1 日、ロシアのメノバージェフ大統領が北方領土の国後島を訪問した。
- ◎ 11 月 1 日、衆議院予算委員会の理事らは尖閣諸島沖で海上保安庁の巡視船と中国漁船衝突事件の状況を撮影したビデオ映像を視聴した。また、11 月 2 日、状況を撮影したビデオ映像がインターネットに流出する。

会報第 12 号に折込みました「協賛金募集のお願い」について、下記の通り多くの方々から快く協力を頂きました。心より感謝申し上げます。既に数回ご協力いただいた方、今回初めての方も、草の根活動の大切さを改めて痛感しております。

今夏の協賛金総額 (10 月末現) 31 名 401,000 円

(発足からの総収入 1,901,062 (200 件) - 総支出 1,521,943 = 残額 379,119)